

ご挨拶

ようやく最後のご報告に到達いたしました。平成17年7月に「日本史随想、海軍篇」という名でホームページを開設してから約13年。その間、平成18年12月には同じ名で小冊子を配布して以降は、ホームページも専らその名で統一してきましたが、今回を以てすべて文字通りの最終篇となりました。

今回の「比島沖海戦」から終戦までには、なお10ヶ月近い月日が残っていますが、日本海軍としての組織的な抵抗は特攻や回天などにその役割を譲り、「艦隊」と名付けることの出来る組織は、二度と再建されることはありませんでした。

翌年4月の、駆逐艦隊を率いた戦艦大和の沖縄方面艦隊特攻は、海戦というよりは一種の儀式であり、しかも海軍予備学生出身の吉田満の名著がありますので、敢えて言及を回避しました。

(ただし、吉田氏の最初の版は進駐軍の検閲によってかなりカットされていますので、有志の方による復活を期待します。)

実はここで比島沖海戦が登場するのは、むしろ論理的には有りえないことなのです。

既述のように、マリアナ沖海戦での「完膚なき惨敗」以降、日本海軍の機動部隊は二度と再建されることはありません。むしろスプルーアンスの後任のハルゼーが、容赦なく日本軍の基地航空部隊の殲滅を進めるのに対して、どう全滅を免れるかが喫緊の大事の筈でした。ところが中枢部門の作戦は、こういう窮状を無視した真逆のものだったのです。

航空機の支援なしの栗田艦隊を、米軍の誇る大機動部隊の重囲の中に突入させ、混乱に乗じてレイテ湾内に残る敵輸送船を撃沈しようという作戦です。

問題の根幹は、全てが好都合に進行した場合だけに成功し、しかも期待できる成果はせいぜい数十隻の空船（からぶね）だけというお粗末です。逆に最悪の場合は、四の小沢艦隊は無視されて、栗田艦隊は集中攻撃で全滅し、そのあと四部隊も包囲殲滅されてしまうことです。おそらく慎重なスプルーアンスならば、その道を選んだでしょう。ソロモン戦時代にゆっくり護衛空母の訓練を続けていた彼ならば、現実よりもさらに巧妙な対応をしていた可能性も大きかったのです。

八方塞がりの状況下で、当時の中枢部の立案者は、コロ島戦の指揮官たちのように、現実を正視し、身の丈に合った作戦を採るという発想はありません。空船の空荷という空疎な成果を過大視し、空中楼阁にも等しいこの作戦の危うさを無視してしまいました。

作戦立案の当初からその事実に気付いていたのが、航空部門の責任者である大西中将です。彼の率いる第一航空艦隊の残存機は僅か40機。これでは栗田艦隊を支援どころか、偵察行動がやっという惨状です。福留中将の第二航空艦隊の220機を動員しても、文字

通り焼け石に水です。要するに栗田艦隊は、戦艦武蔵、大和以下の全艦艇と全乗員は、全滅を覚悟して出陣せよ、というのがこの空疎な作戦の根本の発想でした。

戦後の「反戦」一色の風潮の中で、特攻作戦自体を批判したり、逆に栗田艦隊の脱出作戦成功を批判する向きがあるのは、こういう経緯を全く無視しているからです。この数日間、特攻作戦による戦死者は数十名。脱出に成功した栗田艦隊の乗員は2万人に近い数と推定されています。

日米の戦力差を思えば、この結果は予想を遙かに越えるものでした。米軍の幹部が一時は特攻関連の情報を遮断し、侵攻作戦の変更・延期を図ったのも当然の措置でした。

(戦後の特攻批判の中には、この発足時の特攻隊の特殊性を考慮しない見解がまま見られます。慎重な注意が必要です。)

終戦から間もない時期を過ぎると、硬直的な特攻否定論は次第に減少し始めました。一つには実際にかなり大きな戦果が実現していたのが判明したことによりますが、不思議なのは、比島沖海戦での栗田艦隊批判組が、あの「海軍反省会」の編集責任者として、特攻作戦を否定的に捉えていることです。これは全くの自己撞着です。

栗田艦隊の敵中突破四千キロの奮戦が、あの「神風特別攻撃隊」との連動によって成功したのは、確かな歴史的事実です。それとも、なおもその本心としては、栗田艦隊がレイテ湾であえなく米軍輸送船団と無理心中する場面を、実は期待していたのでしょうか。

戦後七十年以上を経過して、多くの「事実」が明らかとなりました。おそらく今回の最終篇がその最後となることでしょう。それが最後の海軍兵学校校長であった栗田中将の最後の戦いを舞台としたのは、全くの偶然です。しかし結果としてお互いの「魂」が呼び合っ
て「真実の海軍物語」が生まれたのは、間違いのない事実です。

なお「神風特別攻撃隊」の神風は、創設された当初は、「しんぷう」と呼びましたが、通信社が「かみかぜ」と発信し、それ以降は、その名で定着しました。

現在の英語辞書でもkamikazeの名は広く一般に使用されています。

以上、深甚な敬意を以て。

平成30年5月30日

由岐 真